

学校体験活動による教職課程の充実の取り組み (2) 一教職課程 初年次の「保育教育職現場体験活動」による学生の意識調査

Enhancement of a teacher training curriculum through school volunteer activities: Survey of student attitudes through “childcare education field experience activities” in the first year of the teacher training course

梶間奈保 西村健一

(保育教育学科)

キーワード：学校体験活動、ボランティア活動、教員養成

1. はじめに

近年「教師不足」という言葉が取り上げられ、教育現場の処遇改善や教員を目指す学生が早期に現場体験を実施するなど様々な対策の検討がなされている。文科省による「教師不足」の実態調査は2021年度から行われ、2023年度の調査においても「依然として教師不足の状況改善が厳しい状況であると」報告されている(文部科学省,2023)。2022年の調査では「見込み数以上の必要教師数の増加」の項目に「採用辞退者数の増加」や「採用倍率の低下」があげられており、教員を目指す学生が教員養成校で免許取得をしたとしても教育以外の仕事を選択したり、教員として長くは続かなかつたりする現状があるといえ、これらが教員の担い手不足にもつながっているともいえる。

しかし、「教職の魅力向上に関する取組の推進」(浜銀総合研究所,2022)によれば、教職志望をする学生の81.2%は大学入学前に教職課程を目指している。さらに、幼児期から高校生の頃に教職を最初に目指した学生も84.8%と多く、早い段階で教育の分野を意識し大学に進学をしたといえる。この教職課程に身を置く学生の就職状況について文部科学省の調査(2023)では、各大学が教員採用試験対策への注力や教育委員会と連携した教員志望者の確保などの対策をとったことにより、令和3年度以降、教員就職率は増加傾向にあると述べている。つまり、教員養成大学での教職に関する学びや経験が学生の教職志望に少なからず影響しているといえる。例えば市村(2023)は、「教員養成カリキュラムが先生になるための学びと学生が感じていない」と述べ、教員免許取得の断念の要因として指摘する。教育実習の経験と教師志望の関連性についてはいくつか研究されている(櫻田(2023)や川田(2023))が、教育実習は教職履修の最終段階で取り組むため、学部3年次や

4年次に実施する。そのため、学生はある程度教職志望を固めている段階といえ、教育実習を通して自身の適正や現場での実践性を学ぶ。

一方で、2019年度から改訂・施行された教職員免許法に基づき、教育実習の一部を学校体験活動に代替できることになり、学校体験活動の積極的活用が推奨されている。峯村ら（2020）によれば、学校体験活動に相当する科目を1・2年次に開講している教員養成課程の大学が多いと報告しており、この科目は前述した教育実習に比べ「学生の抱く教師像の具体化」する成果があると述べている。筆者の所属する学科においても、2022年度から1年次に「保育教育職現場体験活動Ⅰ・Ⅱ」を必修の科目としてカリキュラムに組み込んでいる。本学科では、小学校教諭一種免許状の取得だけでなく、特別支援学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得が可能であり、学生らは複数免許の取得を目指して2年次以降の履修を検討する。そのため、1年次は自身の目指す教職分野や教師像は不確定な部分も多い。しかし牧瀬（2023）が述べているように、学生らは科目を通して「保育者・教員の職務性や子ども理解の意義」を理解することができており、この科目の履修経験が、学生自身の教育観や教師像の土台となり、さらには教職への進路選択へとつながっていくと考える。

以上のように、教員を目指して進学してきた学生の教職への就職につながるカリキュラムとして学校体験活動を位置づけ、学生の意識の変化やその効果について検討していくことが重要であるといえる。そこで本稿では、筆者らが所属する島根県立大学人間文化学部保育教育学科1年次の開講科目である「保育教育職現場体験活動Ⅰ・Ⅱ」の取り組みと成果・課題を報告する。

2. 保育教育職現場体験活動の概要

1) 概要

本稿で取り上げる「保育教育職現場体験活動Ⅰ・Ⅱ」は春学期開講の「保育教育職現場体験活動Ⅰ」と秋学期開講の「保育教育職現場体験活動Ⅱ」の2つに分かれており、学科の必修科目として位置づけている。それぞれの定められた期間に保育・教育・児童福祉に関連するボランティア活動を指定時間数以上実施することが求められているほか、講義やボランティア報告会、現場観察・見学及び体験活動を取り入れた授業となっている（表1-1参照）。

ボランティア活動は自主ボランティアとしており、各学生が大学から案内されたボランティアや地域で実施しているボランティアから関心のあるボランティア先に直接打診・活動の内諾を得て、実施をする。

表 1-1. 保育教育職現場体験活動 I・II の概要

科目	学期	授業内容	ボランティア活動時間数
保育教育職現場体験活動 I	春学期	<ul style="list-style-type: none"> ■保育・教育・児童福祉職に関する概要の基礎を専任教員の講義、ゲストティーチャーの講義から学ぶ ■ボランティア活動計画の立案 ■ボランティア活動の心得（個人情報への厳守、電話のかけ方や服装のマナーなど） 	19 時間以上
保育教育職現場体験活動 II	秋学期	<ul style="list-style-type: none"> ■ボランティア報告会 	15 時間以上

なお本学科では、図 1-1 に示すように 4 種の免許・資格種を取得するカリキュラムを編成しており、2023 年度に履修した学生の入学当時の希望する免許・資格種は図 1-2 の通りである。学生は、卒業後の希望進路に応じて 2 免許の履修モデルを選択する。1 年次は履修モデルの変更は柔軟に対応できるが、学生は各分野の基礎科目の履修が多くなる 2 年次の春学期には履修モデルを固める。

<p>●取得できる免許・資格種</p> <p>保育士資格 幼稚園教諭一種免許状</p> <p>小学校教諭免許状 特別支援学校教諭免許状 ※司書教諭</p> <p>●履修モデル（取得可能な免許・資格種）</p> <p>1) 幼・保モデル（幼稚園教諭一種免許状、保育士資格）</p> <p>2) 小・幼モデル（小学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状）</p> <p>3) 小・特支モデル（小学校教諭一種免許状、特別支援学校教諭一種免許状）</p>

図 1-1. 本学科の取得できる免許・資格及び履修モデル

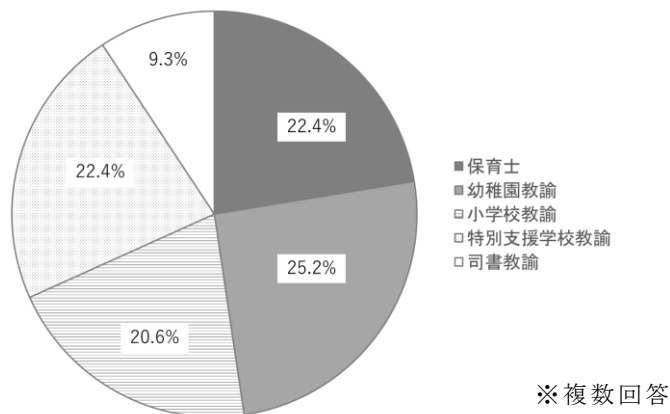


図 1-2. 大学入学時の取得希望の免許・資格 (2023 年度)

2) 授業の構成—講義内容—

(1) 保育教育職現場体験活動Ⅰ

春学期に開講するこの科目は、保育・教育職に関する毎週の講義と19時間以上の自主ボランティア活動で構成される。履修モデルの参考となるよう、4種の免許・資格の概要について偏りなく学ぶ機会を設けるため、以下の表1-2のように各分野のゲストティーチャーを招いた。2022年度の開講内容と主な授業内容の構成はほぼ同様である。

表1-2 保育教育職現場体験活動Ⅰの授業概要（2023年度）

	授業内容	担当
1	本科目の意義と概要	科目担当教員
2	保育・教育職の概要と地域連携にみる子どもの育ち	科目担当教員 学科教員
3	幼児教育・保育の概要と幼児理解の意義	学科教員
4	幼稚園現場の仕事紹介	松江市立幼保園のぎ園長
5	小学校教育の概要と児童理解の意義	学科教員
6	小学校現場の仕事紹介	松江市立忌部小学校校長
7	ボランティア活動の安全・保健管理 個人情報の取り扱いとSNSについて	教職センター特任教員 学科教員
8	ボランティア活動の心構えと計画立案 特別支援教育の概要と児童・生徒理解の意義	科目担当教員 学科教員
9	特別支援学校の参観（松江養護学校乃木校舎を訪問）	
10	特別支援学校生との交流授業	
11	児童福祉施設の概要と児童理解の意義	学科教員
12	児童福祉施設の仕事紹介	島根県中央児童相談所
13	ボランティア活動の実施について	科目担当教員
14,15	※ボランティア活動時間にあてる	

(2) 保育教育職現場体験活動Ⅱ

秋学期は、15時間の自主ボランティア活動のほかに現場体験活動、ボランティア報告会で構成される。ここでいう現場体験活動は、学校が決めた日程で指定する各学校や施設に、1日ないしは半日の体験活動を約20名のグループで行うものである（表1-3参照）。この現場体験活動を経て、春学期と同様に自主ボランティアを実施し、科目の総括として報告会を実施した。

表1-3 保育教育職現場体験活動Ⅱの授業概要（2023年度）

内容		
9月	ガイダンス、現場体験活動の概要・留意点	
	Aグループ 21名	Bグループ 22名
	幼稚園	幼保園
	養護学校	I小学校
	I小学校	N小学校
10月	秋学期からのボランティア活動について	
	幼保園	幼稚園
2月	ボランティア報告会	

3) 学生のボランティア活動状況

本大学のある島根県には複数の保育者養成校があることからボランティア案内をする施設側が一括で情報提供できるように、松江市がボランティア求人を各施設及び園からとりまとめ、5月頃に関連校に周知をする流れをとっている。学生はこのボランティア求人一覧のほか、大学教員からの案内や地域で募集しているボランティア活動などにも参加し、規定の時間以上のボランティア活動の実施を目指す。ここでは、春学期と秋学期に実施した学生のボランティア活動状況について報告をする。

(1) 保育教育職現場体験活動Ⅰのボランティア活動状況

まず、春学期の保育教育職現場体験活動Ⅰで実施された学生のボランティア活動期間は、6月7日～8月22日と約2か月間であり、期間内に延べ285回、総時間1153.3時間のボランティア活動が実施された（以下、表2-1参照）。春学期は19時間以上のボランティア活動の実施が必須となっており、平均して1人あたり約6.6回の活動実施、約26.8時間のボランティア活動を実施した。

表2-1. 保育教育職現場体験活動Ⅰのボランティア活動状況

	合計	平均	最大値	最小値
ボランティア活動回数	285回	6.6/1人	13	3
ボランティア活動時間	1153.3時間	26.8/1人	56.7	11

ボランティア活動の先の種別は以下の図2-1に示す通りである。「保育園・幼稚園」（認定こども園等も含む）が36.1%と一番多く、次いで「大学」と示された項目が32.9%だった。この項目については、大学教員が大学内で実施した子ども向けのワークショップや活動等にボランティア活動として参加したものを示している。次に放課後児童クラブが14.6%であった。その他の学校機関は、中学校や高校を示している。

図2-2に示す具体的なボランティア活動については、活動記録に記入する資料には5種類の記号で区別しており、「イ：保育、教育活動の補助（生活場面、一緒に遊ぶ、活動の支援、職員の補助等）の活動」が73.7%と一番多く、次いで「エ：環境整備（掲示物の準備、屋内外の清掃等）」が10.5%であった。

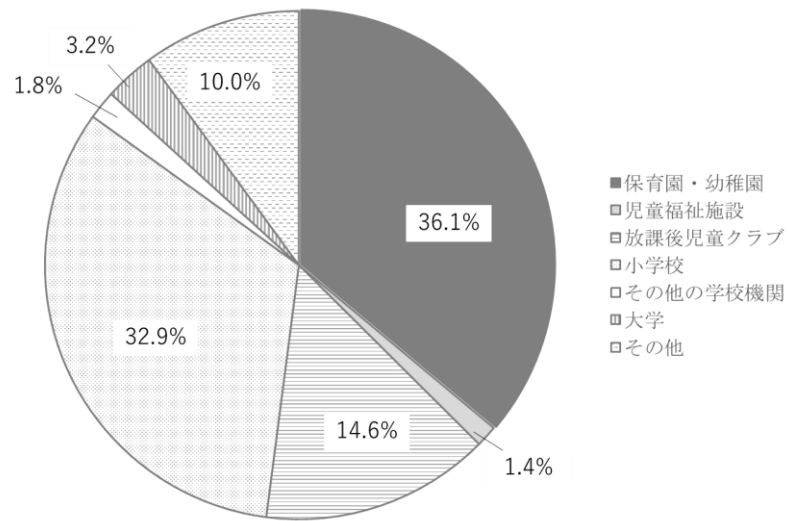
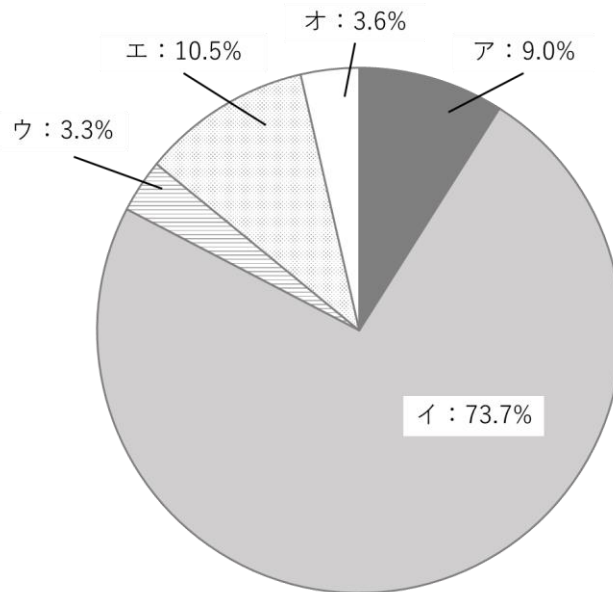


図 2-1. ボランティア活動先の種別（保育教育職現場体験活動 I）



ア：行事にむけての準備及び当日参加
 イ：保育、教育活動の補助（生活場面、一緒に遊ぶ、活動の支援、職員の補助等）
 ウ：教材作成の準備
 エ：環境整備（掲示物の準備、屋内外の清掃等）
 オ：その他

図 2-2. ボランティア活動内容の種別（保育教育職現場体験活動 I）

(2) 保育教育職現場体験活動Ⅱのボランティア活動状況

次に秋学期の保育教育職現場体験活動Ⅱで実施された学生のボランティア活動期間は、10月14日～2月5日と約2か月間であり、期間内に延べ228件、総時間857時間のボランティア活動が実施された（以下、表2-2参照）。秋学期は15時間以上のボランティア活動の実施が必須となっており、平均して1人あたり約5.3回の活動実施、約19.9時間のボランティア活動を実施した。

表2-2. 保育教育職現場体験活動Ⅱのボランティア活動状況

	合計	平均	最大値	最小値
ボランティア活動回数	228 回	5.3/1人	11	2
ボランティア活動時間	857 時間	19.9/1人	34	15

ボランティア活動の先の種別は以下の図2-3に示す通りである。「大学」での活動先が27.3%と一番多く、次いで「保育園・幼稚園」（認定こども園等も含む）が26.9%、放課後児童クラブが15.9%であった。

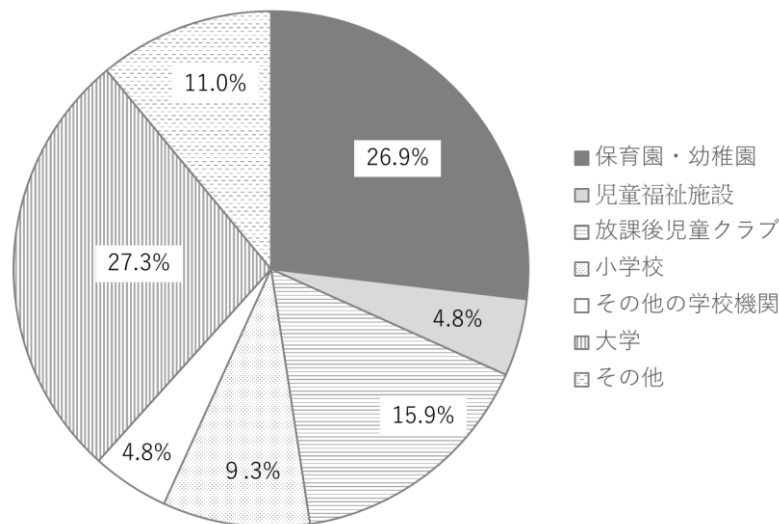
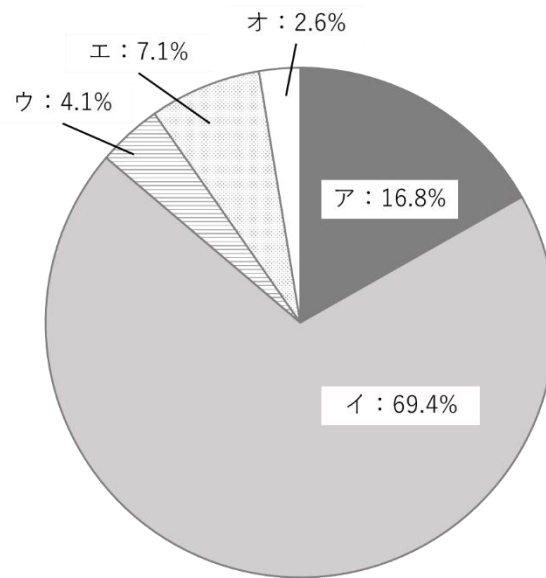


図2-3. ボランティア活動先の種別（保育教育職現場体験活動Ⅱ）

図2-4 具体的なボランティア活動については、春学期と同様に「イ：保育、教育活動の補助（生活場面、一緒に遊ぶ、活動の支援、職員の補助等）の活動」が69.4%と一番多く、次いで「ア：行事にむけての準備及び当日参加」が16.8%であった。



ア：行事にむけての準備及び当日参加
 イ：保育、教育活動の補助（生活場面、一緒に遊ぶ、活動の支援、職員の補助等）
 ウ：教材作成の準備
 エ：環境整備（掲示物の準備、屋内外の清掃等）
 オ：その他

図 2-4. ボランティア活動内容の種別（保育教育職現場体験活動Ⅱ）

（3）ボランティア活動状況のまとめ

春学期及び秋学期ともに約 2 か月間の間に規定の時間以上のボランティア活動を実施するため、少ない参加回数で多くの時間数になるボランティア活動で終わっている学生もいたが、多くの学生が定期的にボランティア活動先に出向き、子どもとの関わりや実務経験を重ねていくことができていた。中には 1 人で 10 回以上もボランティア活動に参加をしたり、規定以上の時間数をこなしたりする学生もみられた。

ボランティア活動先については、保育園や幼稚園のボランティア案内が多くあることから、小学校教諭を目指す学生であっても活動に参加をする機会が多いといえる。一方で、小学校でのボランティア活動は母校での実施や本学科との連携校での実施が主であるが、幅広くボランティア案内を行っていない。そのため、放課後児童クラブで小学生と関わる経験を求める学生も一定数いる。

ボランティア活動の内容については、教職員の補助が多く秋学期は行事も多くなることから行事の参加のボランティア活動も増えたといえる。

3. アンケート

次に、学校体験活動の実施が教職の免許・資格取得にどのように影響をしたのかを明らかにすることを目的として保育教育職現場体験活動Ⅰ・Ⅱの終了後、本科目受講生に対するアンケートを実施した。倫理上の配慮として、回答結果を公表することを説明し、同意しない場合は回答しなくてもよいこと、回答を成績評価と結びつけることは一切ないと伝えた。回答は匿名で収集し、回答率は100%であった。

(1) 大学で取得希望する免許・資格（複数回答可）

調査の結果、特別支援学校教諭 30 (25.4%)、幼稚園教諭 28 (23.7%) 小学校教諭 26 (22%) 保育士 25 (21.2%) 司書教諭 9 (7.6%) であった。

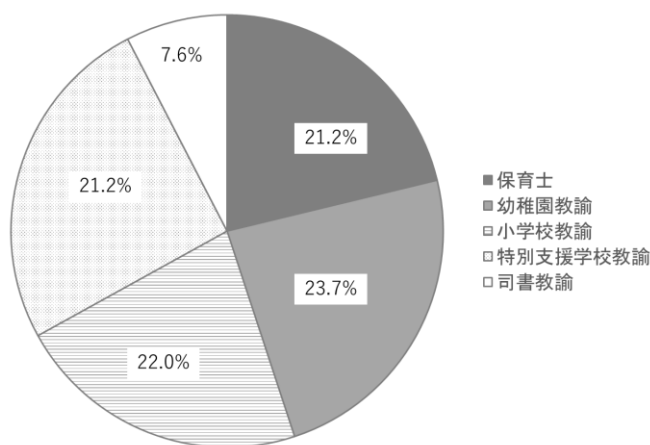


図 3-1. 大学で取得希望する免許・資格

(2) 主となる免許・資格

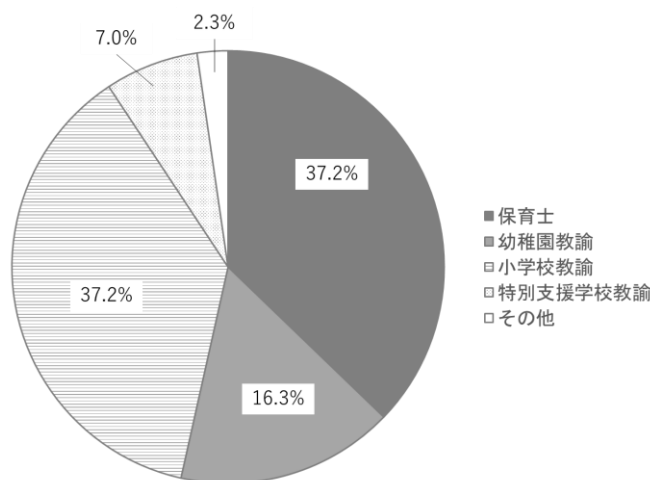


図 3-2. 取得希望する中での主となる免許・資格

調査の結果、小学校教諭（16）保育士（16）幼稚園教諭（7）特別支援学校教諭（3）、司書教諭（0）、その他（1）であった。

（3）ボランティア先での充実度

調査の結果、充実していた（35）やや充実していた（8）であった。

（4）増やしてほしい分野や活動内容があるか

調査の結果、ない（21）どちらでもない（12）ある（10）であった。

（5）増やしてほしい分野や活動（自由記述）

調査の結果、社会的養護関連の施設 9（56.2%）、特別支援教育 4（25.0%）、小学校 2（12.5%）、家庭 1（6.3%）であった。社会的養護関連の施設の内訳は（児童養護施設（4）乳児院（4）、児童相談所（1））であった。

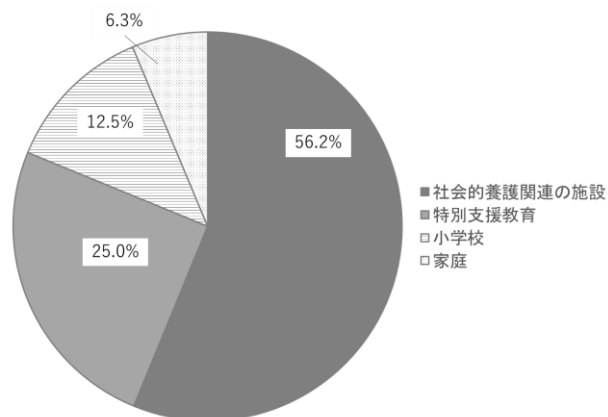


図 3-3. 大学で案内されるボランティア活動で増やしてほしい分野や活動内容

（6）希望する免許・資格に変化があったか

調査の結果、変更した 4（9.3%）変更したい 3（7.0%）興味を持った 10（23.3%）変化なし 26（60.5%）であった。

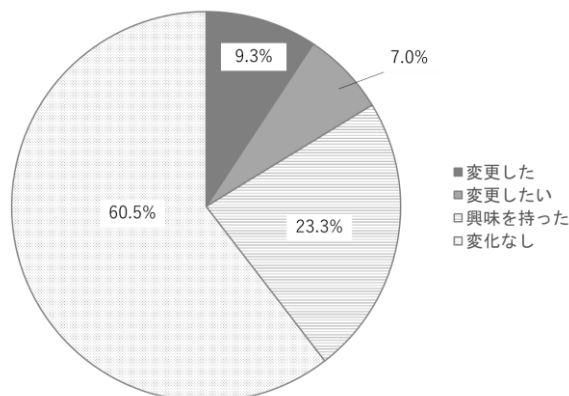


図 3-4. 本科目の授業後、希望する免許・資格への変化

(7) この授業を通しての視点の広がり

調査の結果、視点が広がった (35) やや視点が広がった (8) であった。

(8) 視点が広がった理由 (自由記述)

43 の自由回答の内、19 回答 (44%) が「子ども」に関する記述をしていた。自由記述をマイクロソフトのフォームズにてワードクラウドに変換した。その結果、図 3-5 のようになった。



図 3-5. 本科目の授業を通して視点が広がった理由

ここで、本アンケートの項目ごとに結果から見えることについて述べる。大学で取得希望する免許・資格では、特別支援学校教諭が最も多い。これは、本学科の免許取得モデルにおいて、小学校・幼稚園免許と併せる教員免許として特別支援学校教諭が考えやすいことが挙げられる。このことは、主となる免許・資格の集計結果で、小学校 (16) や幼稚園 (7) と比べて特別支援学校教諭 (3) が最も少ないことから明らかであろう。

ボランティア先での充実度は総じて高かったものの、増やしてほしい分野や活動内容については興味深い結果が出た。最も多かったものは、社会的養護関連の施設であった。小学校や幼稚園を基本的な教員免許と考える学生が、社会的養護に興味を持つということは大変有意義である。なぜならば、本授業での学びは、学生の視点の広がりを意図したものであるからである。

希望する免許・資格に変化があったかの項目においては、約 40% の受講生に新たな職種に関する興味を喚起したことが明らかとなった。

この視点の広がりを中心に位置するものは、ワードクラウドの結果「子ども」というキーワードであった。本授業の学びを通して、学生自身の子ども像に広がりや深みが出たということは、本授業の学びが狙いを達成したということになるだろう。

4. おわりに

(1) ボランティア活動先の開拓と連携

大学から案内するボランティア活動の主は、未就学児を対象としたものが多く、小学校教諭希望の学生であっても参加をする場合が多い。しかし、前述のアンケート結果の図 3-3 に見られたように、社会的養護関連、小学校の分野でボランティア活動をしたい学生も一定数いる。保育園や幼稚園に比べて、ボランティア活動の受け入れが難しいといえること、ボランティア学生に求められる活動内容が専門的なことが考えられる。本学の学生は、4年間の教職課程の中で土台となる免許・資格を2年次に決めることから、1年次において専門的な分野へのボランティア活動は事前指導を丁寧に行う必要がある。ボランティア活動の開拓には、ボランティア活動先の理解や協力も重要であり、この授業の取組が教職課程の学生の意欲や向上心の土台になる意義ある活動と考える。本科目は開講して2年目であるため、引き続き科目の意義や教職課程での重要性を発信していきながら、幅広いボランティア活動先の開拓をしていきたいと思う。また各分野において学生のボランティア活動を通して連携をとりながら、より良いボランティア活動と教職への学びにつなげていきたいと考える。

(2) 各分野でのボランティア活動を通じた具体的な学びへのアプローチ

本学科の学生は、年度によって図 1-1 及び図 1-2 の取得希望する免許・資格や履修モデルに違いがあり、卒業後の進路においても免許・資格との関連性について傾向がまだ定まっていない。本科目においても1年次は各分野で体験をし、2年次以降の履修モデルについて検討するきっかけをつくる授業であることから、各分野でどのような特徴的な学びが得られているのかを重要視していない。しかし、学生のボランティア活動を振り返る日誌からは、子どもとの触れ合いを積み重ねていく経験だけではなく、教師の関わり方から学ぶ視点、支援が必要な子どもとの関わりから教職に対する考えの視点など、より専門的な見方で子どもや教育福祉現場について考えを深めている学生もいる。このように、学生たちが各分野で得られた共通の学びと各分野の特徴的な学びの観点を整理することで、より効果的なボランティア活動への指導につながり、教職課程の進路で適切なアプローチができるのではないかと考える。大学で実施される学生のボランティア活動は、目的がないまま時間数だけをこなし、経験を積む機会が捉えがちである。本科目の取り組みは、そういった捉え方ではなく、教職課程としてより良い学びにつながるボランティア活動として位置づけ、学生の学びや教職に対する意識の変化について丁寧にアプローチをしていきたい。

謝辞

本論文の作成にあたり、親切丁寧に学生へのご指導にあたってくださった教職センター特任教員の青山啓子先生、赤木寛子先生に感謝いたします。そして、本学科及び本授業の趣旨を理解し、学生のボランティア活動及び現場体験活動の受け入れにご協力して頂いた、関係校や施設教職員の皆様に心から感謝します。本当にありがとうございました。

【参考・引用文献】

- ・ 浜銀総合研究所（2022）「教職の魅力向上に関する取組の推進（教職課程を置く大学等に所属する学生の教職への志望動向に関する調査）」成果報告書，令和3年度文部科学省委託調査
- ・ 市村広樹（2023）「学生の特質とニーズを基にした教員養成カリキュラム概案－「押し付ける教育」から「ニーズに応える教育」への転換」日本教育学会大会研究発表要項 82（0），177-178.
- ・ 川田英之（2023）「教育実習前後における実習生の教師に対する負のイメージの影響-教師志望度に影響する要因-」香川大学教育実践総合研究, 46, 1-9.
- ・ 牧瀬翔麻（2023）「学校体験活動による教職課程の充実の取り組み：教職課程初年次の保育教育職現場体験活動の実践」人間と文化, 6, 39-48.
- ・ 峯村恒平、枝元香菜子、渡邊はるか、藤谷哲、山本礼二（2020）「教員養成課程における「学校を体験する」活動の取り組みと成果—各大学へのアンケートの結果から「学校インターンシップ」に向けて—」目白大学高等教育研究（26）81-88.
- ・ 文部科学省（2023）「教師不足」への対応等について（アンケート結果の共有と留意点）」（通知）
- ・ 文部科学省（2023）「国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の令和5年3月卒業者及び修了者の就職状況等について」（通知）
- ・ 櫻田裕美子（2023）「教職志望意識の変化と教育実習の効果・経験」別府大学紀要, 64, 65-78.